

# 東山古墳群発掘調査報告書

—彦根市古沢町—

1978

滋賀県教育委員会  
暨滋賀県文化財保護協会

# 東山古墳群発掘調査報告書

1978

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

## 序

湖東地域における発掘調査は昨年度あたりから急激な増大傾向にある。同時に新たな資料の増加は、調査結果をまとめ、社会に還元する作業というか、義務の遂行が困難さを増してきた。しかし整理の結果は、遺跡の所在する各々の地域はもちろん、県内において、今後、近江の生い立ちを考えるうえで重要な課題を提示するものが多くあった。

本調査は盛夏の山上で実施されたもので酷暑の中、調査にあたり地元教育委員、地元住民、学生諸君の多大な協力を得た。ここに謝意を表したい。

昭和54年3月

滋賀県教育委員会  
文化財保護課

課長 沢 悠光

## 例　　言

1. 本書は彦根市東山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 本調査は株式会社住友セメントの依頼により滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施したものである。
3. 本調査は滋賀県教育委員会文化財保護課技師近藤滋が担当した。
4. 本報告書の編集、執筆は近藤が担当した。
5. 本調査の図面、写真は滋賀県教育委員会で保管している。

## 目 次

### 序

### 例言

1. はじめに .....	2
2. 位置と環境 .....	2
3. 遺構 .....	4
1号墳	
2号墳	
3号墳	
4. 遺物 .....	9
5. おわりに .....	9

### 挿図目次

第1図 位置図 .....	1
第2図 墳丘配置図 .....	3
第3図 1号墳墳丘実測図 .....	5
第4図 2号墳 同上 .....	6
第5図 2号墳主体部断面図 .....	7
第6図 3号墳墳丘実測図 .....	8
第7図 3号墳墳丘断面図 .....	8 * 9

## 図版目次

- 図版1 上 1号墳全景（南より）  
下 2号墳全景（北西より）
- 図版2 上 2号墳主体部断面（西側）  
下 2号墳主体部断面（東側）
- 図版3 上 2号墳主体部近景（南より）  
下 3号墳墳丘全景（南より）
- 図版4 上 3号墳墳丘全景（北東より）  
下 3号墳主体部近景
- 図版5 上 3号墳墳丘東側周溝断面  
下 3号墳墳丘南東部周溝



- 1 東山古墳群  
2 入江内湖遺跡  
3 矢倉川遺跡（弥生～古墳）  
4 矢倉川遺跡（繩文）  
5 堂谷遺跡  
6 磯崎古墳  
7 佐和山城跡  
8 彦根城跡

第1図 位置図

## 1. はじめに

この調査は株式会社住友セメントが彦根工場に隣接する東山の一部を土取り地としたことから実施したものである。

国鉄東海道本線の彦根駅に下車すると、その東に近江鉄道の電車基地越しに、山を背にして住友セメント彦根工場が見える。この背後の山が東山で当古墳群はこの山上に立地している。山上には現在住友セメントと、一字一字文字を書かれた広告塔が北から南に並び、この広告塔建設のおり、コンクリートの基礎打ちのための掘穿に際し古墳が確認されたようだ。しかし地山が岩盤であったことから当時はダイナマイトによるハッパで実施したのことから遺構の具体的な様相については明らかでない。

今回、調査に先き立ち遺跡確認の依頼のもとで事前踏査を実施したところ、新たに2・3号墳の所在が確認され、発掘調査を実施することになった。なお調査に際しては彦根市教育委員会および株式会社住友セメントの方々に多大の御協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

## 2. 位置と環境

東山古墳群を中心とする彦根市街地周辺の歴史的環境は、地理的要件からの結果なのか比較的寂しい状況にある。つまり現彦根市街は彦根城築城に際して、現国鉄彦根駅付近に流入していた芹川の付け替えによって城下町が形成されたもので、かつ現在の芹川以南の大藪町付近も湿地が広がることから、以前は一部の微高地を除いて、松原内湖に続く広範な湿地となっていたように想像できる。また古代以来の官道である東山道、後の中山道は東山の東側を通過していたことにもよると思われる。ただ一部微高地を除いてとしたのは中世の彦根山には古刹があり、老若男女の参詣で賑っていたことから、所謂朝鮮人街道と呼ばれる道以前にも参詣道があったと考えられるからである。このことから古代においては松原内湖周辺は住環境として適さず、結果として遺跡が確認できない状況にあるのではないかだろうか。これに対して北の米原町入江内湖には弥生時代から古墳時代にかけての広範な遺物散布が確認され、松原内湖と区分する礫山の西端には横穴式石室を主体とする後期古墳磯崎古墳があり、北側斜面には鶴尾の出土で知られる白鳳時代寺院跡の堂谷遺跡があって松原内湖側とは対照的な環境となっている。ただ松原内湖側には礫山の南辺に添って繩文時代から古墳時代にかけての矢倉川遺跡がある。また先の磯崎古墳の開口部は南西側



第2図 墳丘配置図

で、穂山の南斜面に立地することは注目される。

なお時代はまったく異なるが、東山古墳群の北には小さな鞍部を挟んで佐和山城跡が立地している。

### 3. 遺構

先にも触れたように当古墳群は3基から形成されており尾根上に南から北へ1～3号墳と呼称した。そして、いずれもが尾根上とは云うものの若干西よりにあり、琵琶湖側を意識して築かれていた。

#### 1号墳

広告塔建設に際して確認されたが、ダイナマイト使用による地山掘削であったことから、その具体的な遺構の状況が不明であったため、今回は遺構の一部でも明らかになればと思いつき調査を実施した。しかし結果は彼ら確認することはできず、第3図に示すとおり、1号墳墳丘実測図としたものの墳丘痕すら不明であった。

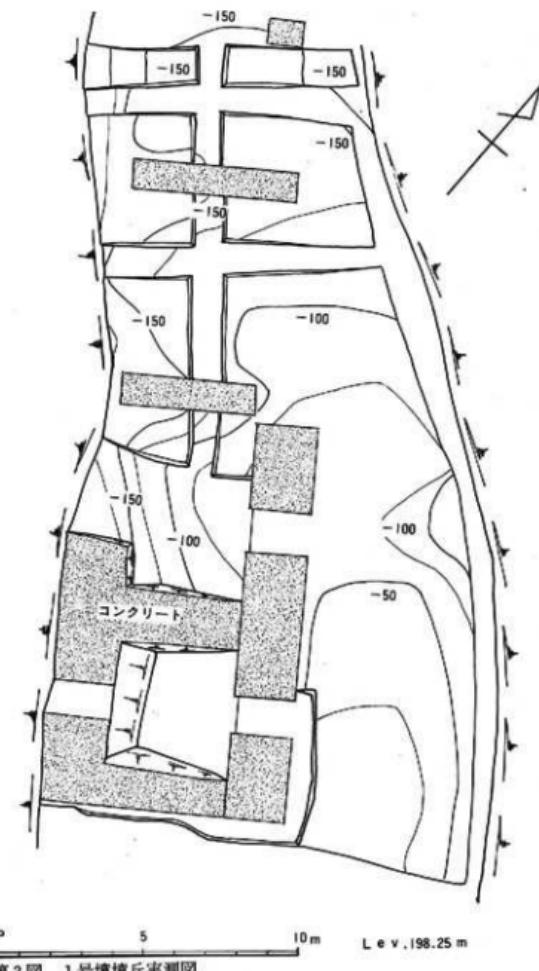
#### 2号墳

1号墳の北40mに位置し、当尾根上では最高所を占地している。また調査前にあっては、あるいは地山の瘤かとも思われたが墳丘南側裾部に尾根を横断するかたちでの、浅い周溝痕と、西から北、そして東側へと丸く裾部の整形痕が認められ調査を実施した。

調査の結果、墳丘は頂上部の僅かな平坦地を除いて、大部分が10数センチの表土を除去したところで地山が検出された。また頂上部については一部皿状の搅乱壙があり、30cm程度の搅乱埋土等を除去すると主体部と思われる土壤痕が確認できた。ただ主体部確認に至るまでは搅乱壙もあったが、埋土の違いが判断できず、墳頂部を中心にサブトレンチを設けた結果、尾根に対して直交する主体部をようやく確認できた。

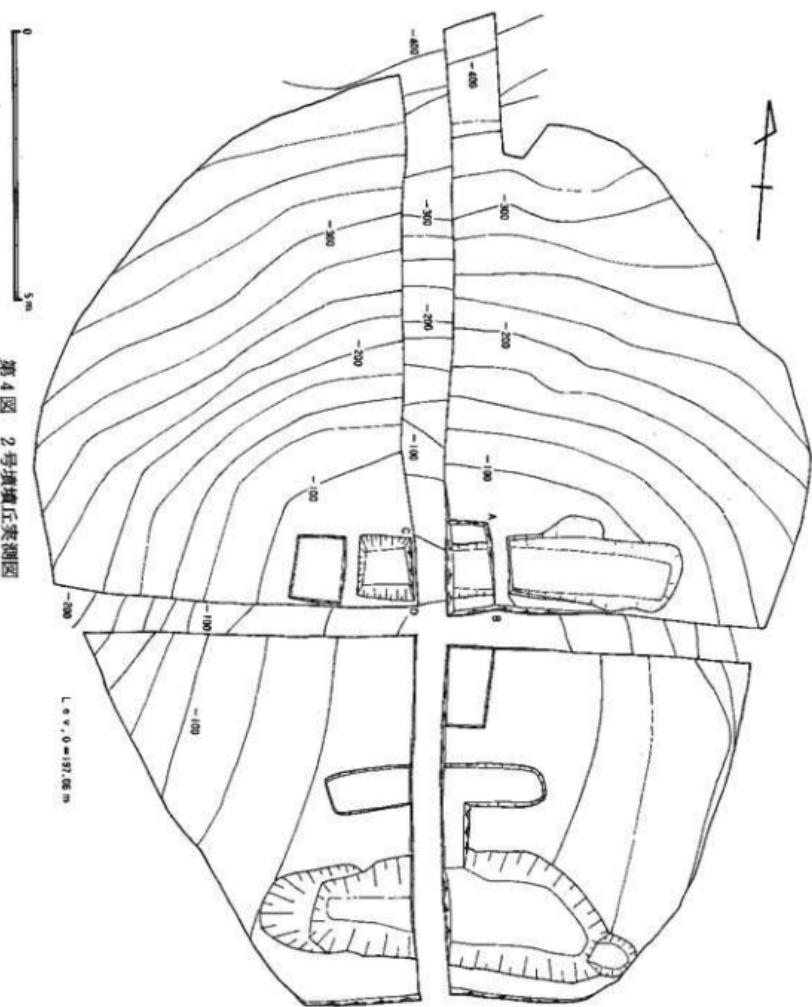
主体部は幅0.7m、長さ5.7m、深さ0.4m以上で、出土遺物はなかった。また東側より床面に径15cm、深さ10cmの円形ピットが検出されたが、このピットは上層からの搅乱に伴なうものと思われた。なお断面観察では掘方と棺跡の区分ができず、2ヶ所において確認したが結果は同様で、棺幅のみの掘削で埋置された直葬墓と考えられる。さらに床面は平坦ではなく、高さについても上部搅乱のため全高は明らかでなかった。

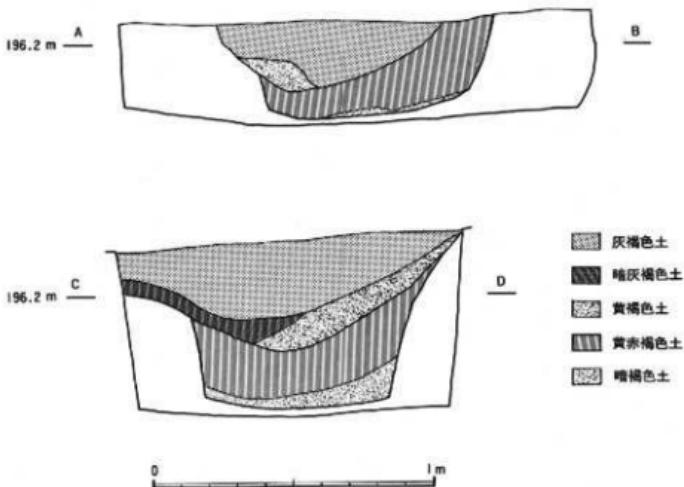
次に墳丘については先にも触れたように南側での周溝痕としたが、結果は搅乱壙で、当初からの溝による区画の存否については明らかにし得なかった。また西から北、東側についても具体的な裾部として施設等を確認することはできなかった。ただ主体部の位置、北



第3図 1号墳墳丘実測図

第4図 2号墳墳丘実測図





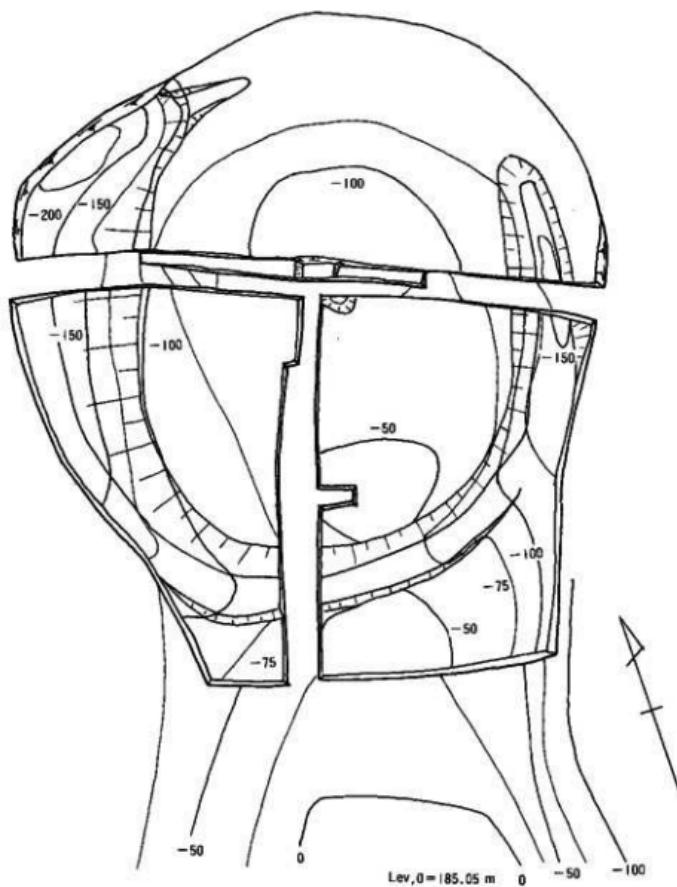
第5図 2号墳主体部断面図

側での等高線の廻り方等から判断すると、墳丘は直径14m、北側比高4mの規模が得られた。

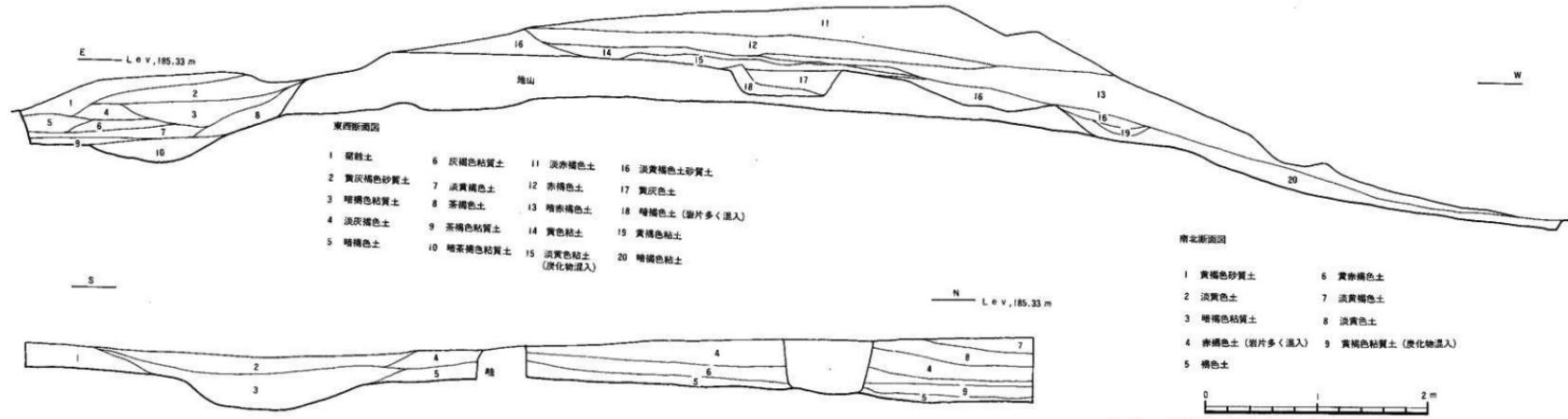
### 3号墳

2号墳の北80mにあって、調査開始時では北側半分は大部分削平されていた。このため削平界を東西断面として精査することとした。この結果、当墳は2号墳に比して尾根部がやや平坦化した部分を占地していたからか、墳丘の東で幅約2m、深さ0.6mの周溝を確認することができた。しかし西側についてはセクション帯の北側では周溝の有無は不明確であったが、南側では墳丘東同様確認することができた。さらに周溝については墳丘南端でも確認できたことから、墳丘径9mに周溝を巡らせた規模であったことが明らかとなつた。

次に主体部についても東西断面の中程で確認できた。埋置状況は2号墳同様、棺幅の掘方に直葬したもので、幅0.7m、高さ0.3mの逆台形断面を確認できたが、長さについては尾根と並行関係にあって、墳丘の半分近くが削平されていたことから明らかにし得なかつた。合せて遺物についても2号墳同様まったく検出できなかつた。



第6図 3号墳墳丘実測図



第7圖 3號壠樁丘東西斷面圖（上）同 南北斷面圖（下）

#### 4. 遺物

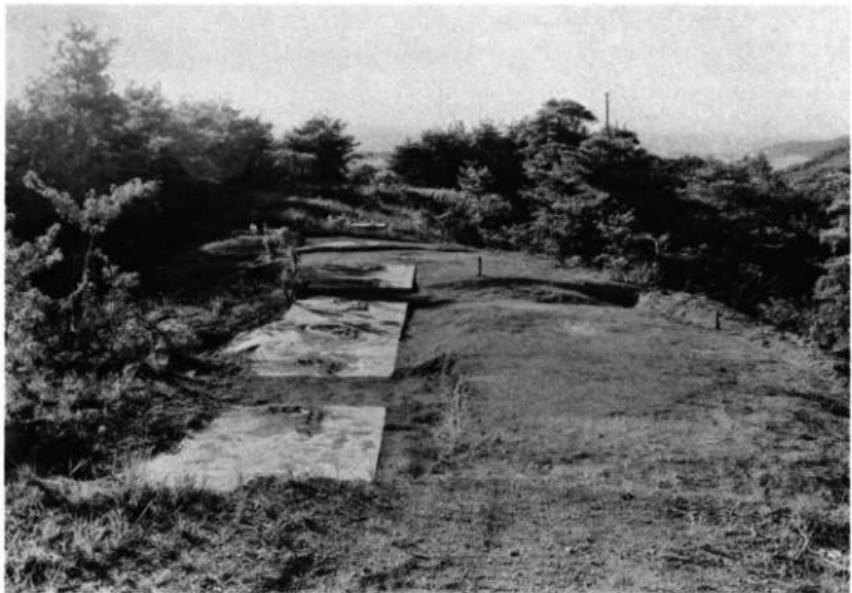
これまでにも記したように、今調査では1片の土器の細片すら検出できなかった。ただ先の1号墳については、その具体的な資料を確認することはできなかったが、当時作業員として参加された地元の人々によると赤く銷た鉄刀片と四角い石があったとされている。

#### 5. おわりに

今回の調査では実質的には2基の古墳の調査となったが、結果は墳丘規模が明らかになった以外は、主体部の存在のみで他は明らかにし得なかった。特に主体部の存在と言っても遺物ではなく、その主体部すら、一応主体部としたものの若干の疑問が残る。つまり掘方を有しないこと、床面が平坦でないこと、深さ、とりわけ3号墳については上部が一度完全に削平されたのち上層が新たに堆積したと考えなければ解し難い土層となっているからである。しかし反面、墳丘のほぼ中央に位置していること、地山を人為的に掘り下げたとしか考えられない断面であることから主体部としたものである。次に時期的なこととしては遺物が何ら出土していないことから、これまた判断は困難であるが、墳丘中央の土壤を主体部として是認した場合、特に2号墳の主体部の規模、1号墳があつて鉄刀が出土したとしての遺物の少なさなどから想定すると古墳時代中期後半の古墳に様相が類似すると判断できるのではないかろうか。ただし1号墳についても四角い石と言うのは五輪塔の一部の可能性もある。と言うのも当山上には庚申塔があったとのことであり、この意味では1号墳の存在すら困難となりかねないのが実情であった。

以上今調査の結果について記述して来たが最後に、当古墳が中期古墳として考えた場合、現彦根市内における古墳としては南の稻枝地区に属する荒神山の後期古墳群と、他はいずれも、その実態が不明であるが後期古墳と考えられる。旧愛知川自然堤防上の出路古墳、東山古墳群の南1kmの正法寺山古墳群、豊郷町に隣接する西葛籠古墳がある程度でありこの意味では当彦根市域における古墳時代史の中では空白を埋める重要な位置付けが得られる。と同時に、この古墳が琵琶湖側である西側を意識して占地していると考えられるところから、先にも触れた松原内湖周辺、特に南側の遺跡の空白地帯において、今後、当古墳を築いた人々の生活跡の確認ができる可能性が生じたと言える。今後の周辺部の調査に期待したい。

# 図 版



1 1号墳全景（南より）



2 2号墳墳丘全景（北西より）



1 2号墳主体部？断面（西侧）



2 2号墳主体部？断面（東側）



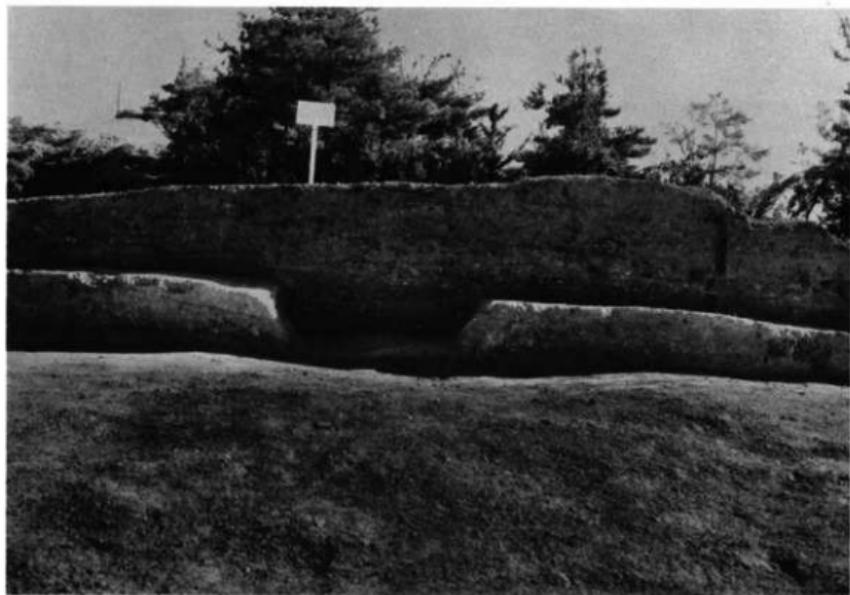
1 2号墳主体部？近景（南より）



2 3号墳墳丘全景（南より）



1 3号墳墳丘全景（北東より）



2 3号墳主体部近景



1 3号墳墳丘東側周溝断面（北より）



2 3号墳墳丘南東部周溝

## 東山古墳群発掘調査報告書

昭和 54 年 3 月

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

側滋賀県文化財保護協会

印刷 京都市下京区油小路仏光寺上ル  
有限会社 真陽社